

「N市民 緑下家の物語」

①

N市は、1945年の原子爆弾投下によって廃墟となった。その後、日本の経済成長とともに復興を遂げ、廃墟の経験は次第にN市民の記憶の中から消え去っていった。

緑下家が県北部の離島からN市中心部に移住したのが1970年代後期、父、緑下川音（みどりしたかわおと）は工業高校の国語の教師をしながら、母、美濃（みの）とともに三人の子供を育てた。

主人公の孤独な青年、緑下稲光（みどりしたいなみつ）はその三男である。稲光は、ひとり言を言うのが癖である。目に映る光景を言葉で描写しテープレコーダーに記録するという地味な趣味がある。ひとり言以外はほとんど無口で、割に合わないその場しのぎのバイト生活を続けている。

長男の名前は、陽（よう）。陽は右翼団体のリーダーの「ボス」という男からクズのような仕事をもらい生活している。ハマノ町の居酒屋で働くマリーという恋人がいる。

次男の名前は、次男（つぎお）。次男は、生まれて三時間で息を引き取ったが、母がせめて名前だけでもと、埋葬時に「次男」という名前を父によって付けられ、緑下家の墓に刻まれたのである。次男は、稲光の口をかりてN市の世界へと顔を出すことができるようである。稲光がしきりにひとり言を言うのは実は亡霊となった次男との対話でもあるのだ。

陽と稲光には、ユミという一人の姉がいる。ユミは突然失踪し、行方知れずである。噂では勤めていた会社の上司との関係に原因があるとされたが、それも噂だからさだかではない。時々、稲光はN市の街角でユミの幻影を見たりする。

ある日（2011年5月7日）、公園でいつものように声の記録をテープレコーダーに吹き込んでいた稲光のもとに兄の陽が現れる。彼はボスから市長の殺害計画を密かに聞かされたことを稲光に告げるのである。

②

公園で、兄の陽から地面に引きずり倒されたN市民緑下稲光は、あいかわらず何の変哲もない孤独な日々を送っていた。

陽の恋人マリーから、稲光は虹見江波（にじみえなみ）という女性を紹介される。出会った最初の日に、二人は稲光のアパートの部屋で一夜をともにし、江波の表現をかりれば「ものす

ごいセックス」をしたのであった。しかし、その夜のことを稲光はまったく覚えていなかった。稲光が言うには、すべては次男兄さんが自分の身体を使って行為したことであった。

それから数日後（2011年6月4日）虹見江波は稲光の部屋に二度目の訪問をする。そのとき彼は「N市民」という小説を書き始めていた。

一方、陽はボスからもらった「N市民に告ぐ」という特殊な広報活動の仕事の合間に、ハマノ町にあるマリーの居酒屋ミックを訪れる。そこで、陽のファンという男から声をかけられる。陽は、その男から世直しのための仕事を依頼される。

N市を見下ろすビルの屋上には、夢遊病者のような女が佇んでいる。長女のユミである。彼女は、誰のものとも知れぬ遠い日々の記憶を一人延々とつぶやいていた。それは、まるでこの街で命を失ったものたちへの追悼文のようでもあった。

③

関係の境目を持続しようと虹見江波から提案された緑下稲光は、週に一度の虹見との交際を続けていた。提案通り、最初の夜以来、虹見との性的関係は留保されていた。その夜のことも本当にあったことなのか不明で、そのことは虹見との対話のなかで話題にあがらないままに稲光の記憶からも消えつつあった。

そのようにして稲光の現実感覚は次第に曖昧なものとなった。このN市の現実より、昨晚見た夢の記憶のほうが彼の意識を支配しているようでもあった。それゆえに、虹見との対話は、現実と夢の境目を明確にする上で大切なひとときであった。

稲光は、虹見の大学時代の先輩と称する男、月牛実（つきうしみのる）と出会う。ユング派の心理学者でもある月牛は稲光のまわりの夢の反乱の原因を身近な人物の無意識的な夢の産み出しであると告げる。そんなアホなと稲光はあざ笑いながらも、姉のユミの存在を思いうかべてしまっているのであった。

そんなとき、久々に稲光のなかに現れた次男が「陽が死ぬ」という予言を稲光に告げる。まさに、緑下陽は窮地に追い込まれていた。ボスはN市長の殺害を決行するが、それは未遂に終わり、陽はその市長殺害計画の実行犯として警察に自首するようにとボスから身代わりを命じられたのであった。それを、あっさり拒否した陽は、計画の密告をおそれたボスの組織から追われることになる。

そんなある日（2011年7月9日）稲光は虹見との対話のなかで、自分たちが花婿と花嫁になって互いの親族たちと記念写真を写している夢を見たと告げる。それが「まさ夢」かどうかを確かめようと二人は稲光の夢の記憶を頼りに街をさまようのであった。そこに血相をかえた陽が現れる。